

福島原発震災から 8 ヶ月が過ぎた。政府の発表とは裏腹に、事態は一向に改善しない。今でも毎時 20 トンの冷却水を炉心に注入している。冷温停止は何時になるのか、未だに明らかでない。見えない炉心の状況を想像しながらの対策が続いている。そうした中、前号でも指摘したとおり、政府は放射能汚染の全国化を着々と進めており、放射能の拡散は始まっている。今後、我々は放射能との長い戦いに突入するだろう。こうした事態をもたらした国や電力会社の責任を厳しく追及しながら、それでも未来に向けて諦めてはならない。

● セシウム入りのセメントで作られた保育園

最近、東京都目黒区のある母親から相談のメールが入った。古くなった保育園から引越しのために立てた新園舎が、汚泥焼却灰由来の放射性セシウム入りのセメントで作られたことが判明し、業者もそれを認めたという。どうしたら良いのか、という相談である。通常、コンクリートの建物の中は、空間線量率が屋外と比べると低い。自然放射線がコンクリートで遮蔽されるからである。ところが、この園舎は建物の内部が屋外の 2 倍もある、という。勿論、絶対値は毎時 0.11 マイクロシーベルトと低いが、明らかに福島原発由来の放射性セシウムが原因である。こうした汚染は今後日本中で起こるだろう。政府が被災地を助けよう、という掛け声で、汚染した瓦礫などを全国の自治体に受け入れを要請しているからである。東京都は全国に先駆けて東北の瓦礫を引き受けた。瓦礫の表面だけを測るサーベイメーターで測定し問題ない、としている。このような測定方法では K g 当り 1000 B q 以下の汚染は検出出来ない。瓦礫を焼却すればその 10 倍以上の放射能を含む焼却灰が出る。それは産廃処分場に運ぶか、セメント原料にされるのである。これまで大量の電気を使ってきた東京都民は、その責任を認めて汚染を受け入れるべきなのだろうか。

● 福島の実状

一方、米どころ福島は今危機に瀕している。福島産米の殆どの放射性セシウム濃度は、K g 当り数十ベクレル以下である。ところが、二本松市や福島市大波地区でとれた米から暫定基準値 500 B q を超え、11 月 25 日には最大 K g 当り 1270 B q のセシウムが検出されたのである。汚染の原因は 8 月に二本松市での予備検査で 500 B q が出たときに推定できたはずであ

るが政府は何ら対策を取らなかった。大きな原因は地形である。両者に共通するのは汚染した山からの水である。汚染した山の落ち葉が分解し、アンモニウムイオンが発生すればセシウムは水溶性になる。これはチェルノブイリでも指摘されていたことである。国はチェルノブイリに何ら学ぶことなく、口先だけは除染を唱えながら農家を救えなかった。日本は科学技術で優れている、という思い上がりの結果である。枯葉の季節を迎え、水道水の汚染も懸念される。チェルノブイリ救援・中部は南相馬市の市民と協力して、A & S 福島（アクティブ・アンド・セイフティ福島）を設立し、食品放射能測定室を開設した。農家が作る作物や市民が持ち寄る食べ物を自分達で測定し、安全安心を確かめるためである。長く続く活動のために全国の皆さまの支援をお願いしたい。

● それでも未来に種をまく

福島前と福島後の日本は変わった。今後様々な形の汚染が全国化し、被曝による病気は増えるだろう。これは脅しではない。チェルノブイリの経験からの冷徹な事実である。にもかかわらず私たちはこの環境下で生きていかなければならない。汚染食品を食べながらその影響を軽減し、被曝を最低限に抑える方策を考えなければならない。これもまたチェルノブイリの経験が役に立つだろう。私たちはチェルノブイリを教訓にし、同じ轍を踏まないように歩まなければならない。汚染された大地で農地を守りながら、如何に汚染しない作物を作るか、必死の福島農家の人々を支えよう。暫定基準を一刻も早く改定し消費者の安全を守ろう。未来の世代にこれ以上の禍根を残さないために私たちがやるべきことは沢山ある。

(河田)